論説

モノの力と感情の記憶

—広島平和記念資料館における展示を事例として—

楊　小平

1.はじめに

本論は、広島平和記念資料館の展示を事例として、展示されるモノと人——その所有者、展示する人、来館者など——がどのように協働しながら、モノが意味付けられるのか、また、モノがどのように人に働きかけるのかを考察する。そこから、原爆体験[1]を展示することの意味を検討し、戦争と平和に関する展示におけるモノの扱いを考え、我々はどのように「平和」として展示されるモノと向き合うべきかを問い直す。なお、以下では、広島平和記念資料館におけるモノを、被爆遺物、資料館建物、模型（レプリカ）、写真、絵画など様々な意味を包括する形でカタカナ表記とする[2]。

2.展示というプロセスにおけるモノの働きかけ

社会学や歴史学、教育学など様々な分野の研究では、道具化される被爆遺物の展示にまつわる政治性と権力性が多く論じられているが、展示物そのものと来館者との関係性を研究の視野に入れるものはほとんど見当たらない。藤原帰一は、個々の被爆遺物を公的博物館に展示することで、個人の記憶、または地域の記憶が「国民の語り」に転換され、「日本国としての国民」を確認するために用いられていると指摘する[藤原 2001]。この転換のプロセスでは、ある特定のモノ（例えば、被爆遺物）に、受動的にそのモノが本来備えている自然的特質とはまったく無関係な、社会・文化・政治・経済的意味が付加されて行く。

近年、文化人類学者の田中雅一は、「道具的世界観」と「象徴的世界観」を批判的に見直し[3]、「人とモノとの多様で相方向的な関係性」に注目している。そこでは、「力が宿っているとされるモノ」という理解に基づき、モノが持つ人に働きかけるエージェンシーについて論じている[4]。足立明は「そのための

前提は、モノを意思作用によって意味づけられるものとしてではなく、アクタント(行為体)としてとらえ、そのエージェンシー(行為能力)を、関係的で、非意図的意志力として考えることである」[足立 2009:176]と述べる。その上で、「その際、重要なことは、人と特定のモノだけではなく、そこに巻き込まれ介入する、さまざまなモノと媒介過程をへて、特定のモノに焦点化するようになっていくという点である。(中略) そして、これらの焦点化は、様々なモノとの媒介過程のくり返すことでより強化される場合もあれば、他のアクターの介入や、媒介過程の偶発性で、焦点化が弱まったり、他のものに焦点化が移ったりする移ろいやすいものなのである」[足立 2009:189]とし、受動と主体という二項対立的な捉え方を克服し、モノと人とのネットワークという視点を提起した[5]。

このようなモノの働きかけという視点を注目する傾向は、原爆遺物のとらえ方に関する研究にも見られる。奥田博子は、原爆遺品は、このような「大きな物語」[6]に対峙することのできる「反=物語」として、被爆の実相を伝えようとする「証言」を裏付ける「証拠」という働きをする。過去/死者と現在/生者とをつなぐメディアとして機能すると指摘する[奥田 2010:123]。このように、被爆遺物というモノは、「つなぐメディア」として新たな関係性をもたらすのである。本論では、展示におけるモノが受動的であり、道具化、象徴化としてしか解釈を与えてこなかったというこれまでの見解に対して、モノと人が媒介しあい、来館者の博物館見学という接触行為によって形成するモノと人とのネットワークの視点から、モノがどのように人に変容を起こさせたのかを考察し、このような変容が原爆体験の意味の構築と伝達にどのような影響を与えるのを明らかにする。

具体的には、本論において、従来の研究の中で言及されてこなかった「モノと人との接触」に焦点を当て、広島平和記念資料館そのものが持つ意味と、被爆遺物、死者と対面する媒介としての写真、被爆風景を再現するレプリカという三つの展示内容のサブカデゴリーを取り上げる。これによってモノが道具や象徴として用いられる博物館の政治性のメカニズムを解体すると同時に、人とモノが向き合うリアリティを描き、モノの力の根源を検討し、モノに潜む「感情の記憶」への注意を喚起したい。

３.研究対象と調査方法

本論の研究対象は、広島平和記念資料館の形成と展示の構成、及び展示物と協働する人である。広島平和記念資料館の形成と展示の構成を分析することで、同資料館のモノの扱い方、またモノを通して表象する公的記憶[7]としての原爆体験の意味を明らかにする。展示物と協働する人は、本来展示を行う館員や、資料の所有者、見学者などの様々な集団と個人を含む。本論では、これまでの研究で取り扱って来なかった見学者に焦点を置き、見学という接触行為のプロセスにおいてモノと他者としての見学者の関係を通して、モノの力を検討する。

筆者は、2007 年 10 月から同資料館が開館して以来初の外国人ピースボランティア――資料館の案内と展示の解説を行うボランティアガイド――として活動しながら、展示内容の実況を調査し、展示に関わる人々、具体的に、館長や資料館の職員、被爆証言者、ピースボランティア、来館者などを対象にインタビューを行い、彼らの活動を観察した。

４.広島平和記念資料館における展示物と原爆体験の公的記憶

（1）広島平和記念資料館の開館及び変遷

1945 年 8 月 6 日に、広島に原爆が投下された。1949 年 9 月、広島市中央公民館に「原爆参考資料陳列室」が設置され、原爆被災資料の展示が始まったが、それは、後に広島平和記念資料館の初代館長となった長岡省吾が基礎を作ったものである[森下 1982]。その後、同年に公布された広島平和記念都市建設法[8]に基づき、広島市は翌年「広島平和都市建設五カ年計画」を立てた。この計画の中には、「平和記念五カ年計画」も含まれており、それによって建設された平和記念施設は記念館、記念碑及び記念公園である。そして、1955 年 6 月に平和記念館、8 月に平和記念資料館が開館し、広島市による公式的な原爆体験の展示が始まった[9]。

広島平和記念資料館が計画される前に、被爆中心である中島地区を記念公園にする計画が立てられ、当時東京大学助教授であった丹下健三グループによる案が、第一位に選ばれた。丹下は、設計のモチーフにおいて、資料館に関して次のように述べている。

とくにここでは、原爆の資料室は、常に記憶をあらたにするものでありそれがまた明日の平和への意志として働くものとなるであろう。これらが、平和を作り出すために有効に働きうる施設であるにちがいない、と考える[都市計画協会 1950:16]。

丹下グループの案によれば、平和記念公園のほぼ中央に記念陳列館を置き、東側に平和記念本館を、西側に集会所を配置し、この両側の建物を廊下でつなげるものであった。平和記念館には、丹下が構想したように、平和に関する諸問題の調査研究、資料の展示が行われるとともに、講堂・展示室・市民サロン・会議室・図書室などが設置された[広島市議会 1991: 296]。1975 年の第 1 回目の大改修を経て、1994 年 6 月、平和記念館が建替えられ、東側の「平和記念館」と中央の「平和記念資料館」との 2 館を一体化した新たな「広島平和記念資料館」が開館し、前者を東館、後者を本館として現在に至っている。更に、2006 年 7 月 5 日には、平和記念資料館の本館部分（1955 年に開館した平和記念資料館）が国の重要文化財に指定された[10]。広島平和記念資料館は、広島市が原爆に関するモノを展示する公的な博物館であり、通称として「原爆資料館」という用語が用いられている[11]。

（2）広島平和記念資料館の運営

広島平和記念資料館の設立主体は広島市であるが、現在の運営主体は財団法人広島平和文化センターである[12]。平和記念資料館の職員は、館長をはじめ、東館の 3 階の事務室に学芸担当（11 名）は、主に、平和記念資料館の管理運営や、原爆被災・平和関係資料の収集、保存、展示及び貸出、被爆被災・平和に関する調査研究、企画展の開催、平和・戦争に関する博物館との連携を担当する。地下 1 階の啓発室には、啓発担当（14 名）は、被爆体験の継承に関する事業の実施、平和意識の高揚に関する事業の実施、平和に関するデータベースの管理、インターネットによる平和情報の発信、情報資料室の運営を担当する[13]。現在、広島平和記念資料館は、展示だけでなく、原爆や平和に関する研究施設としての性格を持っている。

(3) 展示空間の構築及び展示物の構成

広島平和記念資料館では、原爆体験の展示は主に常設展、(特別) 企画展、新着展示などによって行われる。常設展は、東館と本館において行われ、東館は、「平和学習の場」と位置付けられ、本館は、「原爆体験の継承の場」として、「原爆被害の実相」にまつわる展示を行っている[広島平和記念資料館 2007]。

写真 1 被爆前後の中島地区の模型 (東館)

写真 2 爆風による被害 (本館)

東館は、地下 1 階に図書室、啓発担当の事務室がある。そして平和会議やピースボランティアの研修を行う会議室、企画展を行う展示室、平和研修を目的に証言者が証言を語る平和研修室がある。地上 1 階から 3 階まで原爆体験や核兵器について通常展示が行われている。1 階に広島市の設立から原爆投下までの歴史、原爆前後の爆心地 (現平和公園) 周辺の様子を表すパネルや模型 (写真 1) が設置された「廃墟ヒロシマ」というテーマの展示コーナーがあり、三分の一比率での原爆ドーム模型が置かれ、その内部構造が観客に示され、広島に原爆が投下された経緯も説明されている。また、当時、中国新聞社の記者であった松重美人が原爆投下から 2 時間後に撮った写真が大きく展示されている (写真 7)。2 階へ行くと、「戦争・原爆と市民」というテーマが、「混迷からの復興」「続く原爆の被害」「広島の再生」などの写真や実物を通して紹介されている。3 階は、「核時代」と「平和の歩み」という 2 つのテーマに加え、「ヒロシマの願い」「語り続き」というパネルがあり、核

時代の現状や広島市の平和への取り組みについて模型や映像、写真パネルなどで展示され、「核のない世界の平和を願う」ものとして設けられている。

3 階から本館への渡橋を進むと、被爆被害の遺物や写真などが展示されている。まず目の前に入るのは、原爆後の広島市の全体様子を表す模型である。その次に、展示内容は、「熱線による被害」「爆風による被害」（写真 2）「放射線による被害」の３つの部分に分かれる。本館の出口の付近では、被爆者の証言映像を視聴するコーナーや、来館者が感想や広島平和記念資料館へのメッセージを記入できるコーナーが設けられている。

広島平和記念資料館は、被爆遺物や写真１の模型などのモノを用い、モノの破壊と人の死によって「原爆の廃墟」を構成している。そこから、「平和学習」を提唱し、「原爆」と「平和」を同一化する取り組みを行っている。当初、丹下が設計した記念陳列館と平和記念館は、結局、現在の広島平和記念資料館に統一され、一体となっており、意味を同一化する構造が働いていると改めて確認できる。そして、来館者は、東館から本館への見学回路に従い、展示内容を見てゆくことになる。

（4）「原爆被害から平和希求へ」という記憶のあり方

広島平和記念資料館は、広島平和記念都市建設法に基づき、「恒久の平和を記念すべき施設」として建設された。丹下のモチーフにも「平和を作り出すために有効に働きうる施設である」として、その意味が述べられている。しかし、なぜ原爆被害に関するモノを保存・展示する施設を作り、「記憶をあらたにする」ことが、「平和への意志」となることが可能なのか。ロバート・J・リフトンは、「原爆」と「平和」が融合される傾向にあることを示している。彼によれば、「「原子爆弾」と「平和」という二つの言葉が記念碑類にほとんど交換的に用いられる傾向は、原爆の廃墟のなかから平和が生まれたという点で、これら二つを同一視しようという心理的な努力の現われである」[リフトン 1971:25]。

いっぽう、米山リサは、このような「心理的な努力」「感情的な希求」の有効性を認めながら、「原爆は確かに特別法メカニズムの制度化を正当した。しかしながら、この文脈での平和は、戦後復興――前向きで、未来志向で、

過去の「にがい記憶」にしばられないもの――を意味していた」と分析し、「無視されがちな権力の交差的作用」を浮き彫りにした[米山 1999:27]。このような心理学的分析と政治学的な社会構造の解析に対して、文化人類学者の松田素二は、大量の殺虐は、その直接の対応物として平和を希求する意志と感情をうみだすものなのであると述べたうえで、在日韓国人被爆者記念碑や被爆者手帳の事例をあげ、モノを媒介にして非同一性を同一性に転換してその過程そのものを隠蔽するという文化フェティシズムのメカニズムを分析し、「平和の呪物化作用」を指摘した[松田 2009:244]。松田によれば、広島平和記念公園の外に「在日韓国人死没者記念碑」が造られたことや、被爆者手帳の交付を認められなかったことで、在韓被爆者の苦痛と被差別は、具体的なモノに転化され、物語られ眼差される。その後、在韓被爆者の抗争によって、「碑」は公園内に移され、「手帳」の交付が可能となったが、こうしたモノ的解決が在韓被爆者問題の解決を想像させてしまう結果となった。この場合のように、「碑」や「手帳」がもともと非同一性である社会の歴史認識や排除構造と同一化され、モノへの介入が歴史認識や排除構造の変化と同一化されるところにもまた隠蔽メカニズムが作用している[松田 2009:261]。

広島平和記念資料館の建設またその展示の場合でも、松田が示した「非同一性を同一性に転化させる」或いは「構造的関係的同一性によって実体的差異を隠蔽する」メカニズムが機能している。広島平和記念資料館は、広島平和記念都市建設法に規定された平和記念施設として、平和文化都市の表象に寄与される。平和記念資料館というモノの介入によって、広島市の戦前の歴史も原爆被害の実態も戦後の平和志向に転化させてしまう。

しかも、このような「原爆」と「平和」との非同一性を同一性に転化させる状況は、政治的・歴史的な側面に限られず、来館者の日常の活動においても反映されている。広島平和記念資料館を訪れた宮城県からの来館者 M は、広島の旅の感想を次のように話した。

「今、津波の後の宮城の様子は、広島が被爆した後と同じように感じます。町の中では破壊した建物や車、船などだらけです。内の家もなくなったから、一度はこれではもうだめだ、元にはもう戻らないとあきらめてい

ました。資料館で広島の原爆被害を知り、現在のきれいな平和公園と広島のにぎやかさを見ると、何か勇気が湧いてきました。広島も廃墟から復興したから、宮城も復興できると信じたい」（女性、50代、2011年9月聞き取り）

Mのケースでは、津波の被害という特別な経験が介入しており、原爆は焦点とはならず、原爆を復興という平和のサブカデゴリーに同一化させている。他にも、イラクやシリアなどの紛争地域からの来館者は、「広島が、原爆の廃墟から現在の街に復興した様子に勇気付けられた」という感想を述べている。ここでは、広島平和記念資料館を介して、非同一性を同一性に転換させるモノの呪物化が作用しているが、個人の来館者の介入によって、広島市が主導する「原爆被害から平和希求へ」という記憶のあり方から多様な焦点の生成が可能となっている。ここで、自然災害や地域紛争からの復興と平和への希望が焦点と成りうることは、「破壊から平和へ」という構造的関係的同一性による実体差の誤認が働いていると考えられる。

もちろん、このようなモノの力の発揮は、広島平和記念資料館という記念施設に限るものではなく、その空間を構築するモノを通して現われている。次節では、展示されるモノをとり上げて、より具体的にモノと人が接触する過程におけるモノと人とのネットワークの構築と変容を考察する。

５.展示されるモノが語る――事例とその考察

広島平和記念資料館に展示されるモノには、被爆遺物のほか、戦時中の生活用日や、写真、模型、レプリカ、絵画、ビデオなどが用いられている。本館は「原爆体験の場」として、被爆遺物と写真を展示している。これに対して、東館は「平和学習の場」として、写真と説明文章の組み合わせを中心に、レプリカの地理模型や原爆ドームなどと一緒に学習の空間を構築する。両館では、具体的な資料は異なるが、被爆遺物、写真、レプリカ（模型）が主な内容となっていることが大きな特徴である。以下は、この三つのサブカデゴリーから展示されるモノの事例を考察していく。

（1）触れることができない石と触れることができるガラス瓶

ここで、写真 3「人影の石」と写真 4「変形したガラス瓶」を見てみる。広島平和記念資料館は、2011 年 3 月現在、被爆資料を約 21,000 点収蔵している。しかし、実際展示されるモノはその中の数少ない一部だけである。その中、もっとも少ないのは、写真 4 のような触れることができるモノ――見るだけでなく、触ってもらうために展示されるモノである。

写真 3　人影の石（人の影が残る石）

写真 4　変形したガラス瓶など

写真 4 が写っているのは、被爆して変形した鉢とガラスの食器である。下の説明板に「土などが付着したアワビ形の鉢（はち）」（左）と「変形したガラス瓶（びん）」（右）が書かれ、盲目の人のための点字も入れられている。また、同じ意味の英語のタイトルも書かれている。実際に、盲目の来館者は同行者の説明を聞いた後、必ずこれらの鉢と瓶を触る。中には、涙を流す人もいる。来館者 A になぜ涙を流すかと聞いたところ、彼女はその理由についてこのように話した。

「私は、目が見えないが、手で触って、原爆の怖さを感じました。このガラスの瓶を触っても、その様子は見ませんが、確かに形が変だと思うと、その瞬間、悲しくなってしまいました」（日本人女性、60 代、2009 年 7 月聞き取り）

後で、来館者Aが原爆とは関係があるのかと尋ねたところ、彼女は原爆とは関係はなく、目が見ないのも生まれつきであった。Aによれば、瓶を触ることによって、瓶の変形を確認し、体の触覚で瓶そのものの破壊の恐怖を感じた。つまり、恐怖の触感が内面化すると、悲しい気持ちに転換し、涙として現われる。ここでは、リフトンが指摘する「心理的な努力」が働いている。変形したガラス瓶は、Aの個人の感情と広島平和記念資料館に展示される原爆被害を関連させ、破壊に対する恐怖に同一化されている。

もう一つの被爆遺物「人影の石」（写真3）は、爆心地から260メートル離れた住友銀行広島支店の階段の石である。展示の説明文によると、「銀行の入り口の階段に腰掛け、銀行の開店を待っていた人が、原爆炸裂の一瞬の閃光を正面から受け、大火傷を負い逃げることもできないまま、その場で死亡したものと思われ。強烈な熱線により、まわりの石段の表面は白っぽく変化し、その人が腰かけていた部分が影のように黒くなって残りました」とその由来を説明している[14]。写真からも分かるように、ガラスボックスの中に設置されているにもかかわらず、人影が薄くなり、見えにくくなっている。過去には、人影の石で死んだ人は自分のおばであるのではないかと名乗る人はいたが、結局、証拠を見つけず、現在でも人影の人物の確定はできていない。

奥田は、広島平和記念資料館の遺品の〈かつて〉と〈いま〉という視点から、展示物の表象的意味をとらえ、「遺品が決して「過去」の資料ではなく、原爆被害の実態を〈いまここ〉に遺す原点として、原爆被害の実相を伝えるイコンである」と指摘する[奥田 2010:122]。石は、影を所有する人の生と死の場所であり、その人の存在を証明できる。不特定の人の被爆死のイコンとしての石、またその死者は、年月とともに、影が薄くなっていく。来館者のBは、現在の「人影の石」と横に設置された写真にある影の色が濃かった石を見て、次のように語った。

「何で人影が消えていますか。ちゃんと保存できていないからでしょうか。せっかくの実物があるのに、影が消えてしまうと、その本当の過去の出来事も忘れてしまいますね」（日本人男性、30代、2010年聞き取り）

Bは、人影の石を「過去の出来事」と同一性を持つものとして捉えている。その前提には、影がその死者と同一性的ものであるとして認めている。つまり、人影の石は本来の属性を越えて、死と原爆という暴力のイコンとなり、M は、その石を介して、「影が消えてしまうと、その本当の過去の出来事も忘れてしまう」と言い、過去を確認し、忘却を拒否するのである。「変形したガラス瓶」と盲目者との出会いの事例と合わせてみると、人影の石を介して、来館者Bと不特定の死者はネットワーク関係を結ぶ。過去の出来事を確認するBの意志と過去を証明する広島平和記念資料館の動機が、展示される被爆遺物に焦点化されているのである。

（2）写真

広島平和記念資料館では、21,000 点以上の被爆資料に対して、写真は70,000 点近く存在する。資料館には、被爆前の広島の歴史を表す写真や、廃墟と化した爆心地周辺の白黒のパノラマ写真、原爆死没者の生前の姿を写した写真などが展示されている。

写真 5　南京陥落を祝賀する提灯行列（1937）平和記念資料館ホームページより

写真の説明文は、次のように写真の内容を説明する。

「日中戦争の初期には、日本軍が中国の各都市を占領していき、1937 年 12 月には当時の首都南京をも占領した。「聖戦」を信じていた国民はこれに歓呼でこたえ、広島市民もちょうちん行列をくりだして祝賀した。しかし、その南京では、当時、日本軍により多くの中国の人びとが虐殺されていた。犠牲者数については、地域期間によって数万から十数万などいくつかの説があり、中国側は犠牲者数を 30 万人と言っている。」（広島平和記念資料館の説明板より）

写真5は東館1階の「原爆投下までの広島」のコーナーに展示されている。1990年初期、広島の軍都の歴史に関する展示が加えられた理由について、原田治（9代目館長、1993–1997年）は次のように答えた。

被爆 50 周年には、平和記念資料館を建て替え、平和記念資料館の東館を開館しました。この年は広島アジア競技大会が開催され、アジアの選手や役員の皆さんにヒロシマのメッセージを伝えるか苦慮しました。……もとからあります資料館は被爆の惨状についてはある程度伝えています。しかし、多くの来館者から、原爆投下に至るまでの広島の歴史や広島が何を発信しようとしているのかを展示すべきだとの声があり、東館の展示は、そのような視点から構成しました[広島平和文化センター2005:14-15]。

その結果として、広島の軍都としての性格の展示内容が加えられたが、広島の軍事的加害行為の詳細などは言及されず、戦争の加害責任が避けられているではないかと捉える来館者もいる。来館者Cは、平和記念資料館を見学した後、展示について次のように話した。

「本館の展示を見て、確かに原爆被害の悲惨さを強く感じます。しかし、東館には広島の軍都の歴史をすこし紹介していますが、残念なことに戦争が他の国の人々に与えた破壊的攻撃については何も展示されていません。もし平和資料館というならば、原爆のことだけではなく、戦争のことも考え、他の国の戦争によって被害をうけた人々の歴史も展示するべきでないでしょうか」（オーストラリア人男性、20代、2009年聞き取り）

ほかに、中国青島からの女子大学生Dは、写真5に対して次のように語った。

「南京大虐殺による死没者の数については、確かにいろいろな説があります。しかし、ここにこの南京陥落を祝賀するちょうちん行列の写真を貼

って、「いくつの説がある」と書いて、何か言いたいのか分からない。死没者の数について疑問しているのか、それとも他に何あるのか。問題は、日本軍が中国を侵略し、人々を虐殺したことです。残念なことに、私は原爆によって亡くなった人々に対する追憶と悲しみの気持ちと同様のものを、中国の死没者に対しては、少しも感じなかった」(2009年聞き取り)

CとDにとって、原爆体験の公的記憶にある被爆被害の悲惨さは共感するものであるが、「被害」の理解は異なる。彼らにとって、広島平和資料記念館に展示されるのは広島における原爆に関するモノであり、グローバルヒバクシャ問題についても少し言及しているにもかかわらず、被害は原爆被害に限定されていることに対して、被害には加害者と被害者の両方が含まれる。しかも、理解のズレは写真の内容に対してではなく、説明文に対する異議である。このようなズレが生じるのは、写真そのものの真偽の問題ではなく、写真を展示する文脈と理解する文脈が異なるからである。「平和資料館というなら、原爆のことだけでなく、戦争のことも考えるべき」という言葉が意味するのは、「平和」と同一性を持つのは「原爆」に限らず、「戦争」である。松田によれば、「犠牲者への追憶から平和を希求する意志と感情を生み出すのは、一定の意味では自然な感情の発生であるかもしれない。しかしながら、加害者・被害者という形で虐殺に関与したそれぞれの国民国家社会の中で、それぞれ個別の回路で政治化・歴史化・思想化される。「自然な感情としての平和の希求」は、「ドグマとしての平和」へと転化する。平和の希求は、つねにモノを媒介とした争闘を派生させていく」[松田 2009:244]。写真5に来館者CとDが介入して、それぞれの政治的・歴史的・思想的な文脈で、松田[2009]が指摘する「歴史認識と構造排除」と同一化されるため、原爆に対する理解のズレが生まれている。来館者は展示される写真に焦点化することで、広島平和記念資料館が表象しようとする原爆の公的記憶に抗し、新たに戦争の加害責任という意味づけを提示している。

引き続き、写真6と写真7を見てみよう。写真6は、本館における「放射能の影響」の展示するコーナーの一部を写っている。何枚かの写真と説明によって放射能による急性障害の病状が説明されている。写真7では、当時、

中国新聞社であった松重美人が、原爆投下 2 時間後に、爆心地から 1500 メートル離れた場所で撮った写真である。写真には、黒い雨の下、建物が崩壊し、被爆した人々は漠然していて、軍人が食用油をやけどの皮膚に塗っている場面が写されている。

奥田は、遺影は真正面を見詰める肖像画に似た構図をとるものが多く、資料館を訪れる人々一人ひとりが直接、被写体に向き合う格好となる。そこでは、記号を用いてコミュニケーションを行うのではなく記号を相手にコミュニケーションを行うことになる。にもかかわらず、不思議なことに個人的、人間的な親しみが沸き起こってくると述べる[奥田 2010:126]。つまり、写真を介して、来館者と被写体の人とコミュニケーションが生まれる。まさに、写真 7 のように、展示される写真の前に立つ一人の来館者が写真の中の人々と向き合うというような構造となる。写真 6 と写真 7 はどちらも人が中心となって写されている。しかも、「生き生きとした生前の姿」［奥田 2010］である。写真 6 を通して、放射能被爆による急性障害の知識を学ぶことができることに加えて、生々しい被写体の様子から恐怖を感じる。写真 7 を介して、来館者は、被爆直後の街の姿と人の生き様を確認できる。死者が遺したモノは、遺された近親者にとっては「ありき日の姿」をしのぶ手がかりとなり、写真は、その人が生きたその証拠である。来館者は、写真の中の人の身分を確認する必要はなく、被爆者という集合体として理解することで、原爆を無差別・大量の死として還元する。

写真 7 では、黒い雨の中、一人の軍人が食用油でやけどの皮膚に塗っている場面がある。このよう場面は、被写体の人の死を意味すると同時に、彼らが原爆に対してどのように耐え、対応したのかを現わしている。この写真を見た来館者 E は以下のように話した。

「原爆の後は、すぐ黒い雨が降ったと聞いていますが、空はこんに暗くなっていることは知らなかった。怖いですね。（中略）彼らはその時油でやけどの手当をやっていたね。その時は病院も少ない、人々はいろんな知恵を用いて生きていましたね。私も小さい頃使っていましたよ」（日本人女性、60 代、2009 年聞き取り）

Eは、写真を介して黒い雨を知り、被爆された人々の知恵に感動した。彼女は、被写体の人とコミュニケーションは声による会話ではなく、写真の中の人々の身振りを介して、原爆の破壊力を感じ、その人々の生き方を自分の生活体験と同一化させ、共有している。原爆における死を表す写真は、このようなコミュニケーションを通して、被写体のかつての生を確認すると同時に、来館者Eの自分の生も再確認できた。

写真6　放射能の被害

写真7　被爆2時間後の様子

(3) 被災を再現するレプリカと複製の原爆ドーム

写真8　原爆直後の様子を再現したレプリカ

写真9　原爆ドームの模型

広島平和記念資料館の中に展示されるモノはすべてが本物というわけで

はなく、写真１のような地形の模型や、写真８と写真９のようなレプリカも用いられている。

写真 8 のレプリカは、「生死をさまよう」というタイトルで、本館の「原爆体験の継承の場」の展示空間のはじめのところに設置されている。人の模型は、強烈な熱線によって焼け焦げ、血みどろになったボロボロの衣服を、わずかに身にまとい、瓦礫の街を逃げ惑っている様子を再現している。このレプリカは、来館者にきのこ雲の下の人の受難と建物の被災について臨場感をもたらすために設置されている。修学旅行のために来館した小学生の子どもや女子中学生は、写真８のレプリカを見た途端、腕で目を隠し、逃げるように去ってしまった。中には、怖くて涙を流す子もいる。

写真９にある原爆ドームの模型は、2001 年から東館の左奥に設置された。広島平和記念公園にある本物の原爆ドームが 1960 年代初期からすでに状態が悪化し、1970 年代後半以降、原爆ドームの中に入ることは禁止された。しかし、爆心地から 150 メートルの距離しかない原爆ドームがなぜ崩壊せずに済んだのか、あるいは、その中がどのような構造をなっているのかを知りたい人がいる。そのため、広島平和記念資料館の中に原爆ドームの複製品が創られた。

来館者は、平和記念資料館の案内活動を行うピースボランティアに「この原爆ドームは本物ですか」と頻繁に尋ねる。「複製品です」と答えると、来館者は、「びっくりした。本物かと思った」と返事する。それでも、来館者は、ピースボランティアからその天井の構造や窓の配置などについて説明を受けて、複製の原爆ドームに入り、頷きながら、原爆ドームの歴史と構造の知識を理解する。一方で原爆直後の様子を再現するレプリカ（写真８）に対して、小学生や女子中学生たちは、それが複製であると知りながらも、時に悲鳴を上げて逃げ去る。

このように、レプリカに対する知識の満足やリアリティへの驚きを感じる来館者たちにとって、本物と複製品は、どちらも受容されているように見える。しかし、博物館の展示物が本物か複製品かについて、来館者は関心を持たないのだろうか。上述した被爆遺物の節でも論じたように、モノは記号として意味をもつのではなく、人がモノと接触し、コミュニケーションを取る

ことで、モノの力が発揮し、人の記憶が変容する。大貫良夫は、博物館とはできるだけ本物を集め、展示するところだととらえ、「本物は独特の力がある。それは迫力であり、魅力する力であり、説得力であり、喚起力である」と述べる[大貫 1997:271]。これに対して、小林樹は、大貫が示すように本物から得られる情報が多いということを認めながらも、複製品が本物として展示される可能性があることから、本物と複製品の境界線は引くこと自体に意味がないと述べ、モノが展示の文化的コンテクストによって規定され、「ものが語る」というディスコースに潜んだ主体を隠す危険性を指摘する[小林 2003]。小林の議論は、主体の隠蔽の危険性を暴露するものとして有効であるが、人がモノと接触するときに働くさまざまなネットワークのリアリティ――人が本物と複製品と接触する時に表す感情のリアリティ――を隠してしまう。上述した被爆遺物とレプリカの原爆ドームの事例を通して、本物による触感感覚と複製品による疑似体験との組み合わせで展示することは、来館者に空間の提供より、モノと対面する通路をもたらす。これによって、モノの真偽の議論をこえて、モノと人との関係において展示の意味をとえることができる。

6.まとめ

(1) モノが媒介する――公的記憶の表象に抗して

現在、広島平和記念資料館は家庭用品や台所用品、衣類などを含めて21,000点に上る被爆資料を収蔵している。この数の中から選択された展示品は、それぞれの展示の構成部分を構成し、展示される前に、すでに意味が付与されている。藤原[2001]などの研究はすでに明らかにしたように、展示を行う側は一定のメッセージを持つため、展示品を内容として、あるいは道具として展示する。そして、展示されるモノは博物館の展示空間に序列化され、付与される説明文によってその意味が一方的に固定され、テクストとして解読される。このような状況は、田中[2009]が批判する道具的世界観と象徴的世界観にもなっている。モノは生まれる時から展示物として存在するわけではない。奥田の言葉を借りれば、「モノが自然に遺ったのではなく、遺したいという想いを介してそこに在りつづけると解釈することができるのである」[奥田 2010:118]。一方、博物館はモノと人の接触する場であり、博物館に置

かれるモノは、収蔵品や保存物として存在するが、来館者と接触して初めて展示物となるのである[15]。

広島平和記念資料館は、象徴施設としての博物空間とモノの組み合わせによって、「原爆被害から平和への希求」という原爆体験の公的記憶の意味を生成することを可能とした。これは、内堀基光が言う「「もの」の文化的文脈」が働き、モノがその記号性において「文化のなか」の文脈における意味を構築するのである。一方、内堀は「文化のあいだ」の文脈においては、「もの」の意味は決して一義ではないことを指摘した[内堀 1997]。公的記憶を表象するために用いられるモノは、広島平和記念資料館の展示において固定化され、言説化されるが、展示のモノそのものが他者と接触することによって、他者に被害・悲惨という感情の記憶を喚起させる。例えば、「南京陥落を祝賀するちょうちん行列」の写真の事例では、広島と異なる文化的文脈を持つ他者――とくに、日本から被害を受けた記憶を持つ人々――にとっては、逆に、広島平和記念資料館の展示が意味する「平和」の限界を確認するものとなる。

（2）モノが記憶となる――「感情の記憶」というモノの力

小川伸彦は、「広い意味での文化財の保存や展示は、それが他者に関わるものであっても、直接自己に関わるものであっても、アイデンティティ構築という同一の機能を果たしうる。しかし両者には相違点もある。それは、前者が対象とするのは同時代の異文化であってもかまわないのに対して、後者においては、常に過去の物事が対象となる」と指摘する[小川 1999:50]。つまり、過去に属する物事は、現在という時点において解釈され、意味づけられ、それは未来に向かって保存・展示される。広島平和記念資料館の展示は、過去に属する被爆遺物が今日において、原爆体験の公的記憶の象徴的な道具として解釈され、意味づけられている。

足立は、人とモノが媒介する過程は、人に何かを感じさせる過程でもあり、人がモノに惹かれるということには特定のモノと特定の人の性向といったものの因果関係などではなく、多数の人と多数のモノの媒介過程における特定のモノへの焦点化がはたらくということであると指摘する[足立 2009:190]。個人がモノと接触する時、モノは特定の個人によって道具化されるのではな

く、むしろさまざまな人と接触し、協働しあう。その結果、一つの歴史認識がほかの認識を圧倒して共有されるのではなく、モノの間、そしてモノを通して人と他者との間に潜む感情の記憶が機能し、原爆体験の意味を多元化していく。このような感情の記憶について、孫歌は、戦争責任や賠償問題などの歴史認識のレベルの議論とは異なり、過去の出来事に対して戦争体験者が持つ身体的な記憶と、戦争体験を持たない人々が戦争に対して抱く情緒的な記憶という二つの感情の記憶の在り方があると指摘する[孫 2000]。それぞれの戦争、あるいは同じ戦争に対する理解を歴史認識と感情の記憶の両方からとらえる必要があると提起している[16]。上記の事例で示したように、モノと接触して人が自ら成長する力になる。さらに、モノと人との接触に焦点を置くことで、モノが人の記憶となっていく。このようなモノの記憶は、時には戦争が悲惨だという共感を引き起こし、時には、「我々の被害の記憶をここでは展示してない」という理解のズレが表れる。大西秀之は、モノは、現地の象徴体系のなかの意味＝記号として読み解かれることとなり、それ以外の側面は削ぎ落されてしまい、言語によって表現される側面のみが対象となり、それ以外の側面は捨象されてしまうと指摘する[大西 2009]。広島平和記念資料館が原爆に関するモノを記号として読み解き、原爆爆弾の破壊力と被爆被害との意味のみ対象とするという大西の指摘は、展示を行う博物館におけるモノをとらえる観点としては有効である。しかし、本研究であげた事例は、被爆遺物や写真、レプリカなどのモノと様々な来館者の人々による、互いに協働する多元的なネットワークを通して、原爆体験の意味の多元性を表象するものであった。このような、多元的な意味の表象というモノの力の発見は、広島平和記念資料館における原爆体験の展示における、新たな被爆遺物の可能性を示しているだろう。

7.おわりに

2010 年から広島平和記念資料館は、本格的に 1994 年以来の改修が行われる予定で、展示の構成も内容も変化する。特に、「人間の視点」と「個人の被害」に焦点を置き、内容の変更を進めているが、具体的にはどのようなモノを用いて展示を行うのかは未定である[17]。どのような展示内容に変更される

にしろ、本論で示したような、モノと人とのネットワークの視点は、広島平和記念資料館が表象する原爆体験に、モノを通した新たな展示の意味を問うものとなるだろう。

注

[1] 本論では、広島の原爆の体験を表す言葉には、「原爆体験」という用語を用いるが、ほかには、「被爆体験」という用語もある。例えば、高橋真司は、広島・長崎の被害者の体験という立場を取って「被爆体験」を用いた[高橋 2007]。これに対して、筆者は、平和記念資料館では、原爆被害のことだけではなく、原爆の開発から投下に至るまでの過程や広島の歴史、核兵器の現在などを取り扱っていることから、「原爆体験」という語を用いることとする。

[2] この点については、佐野賢治は「『もの』の全体像をとらえるためには、有形の“物”、無形の“もの”を合わせ見る視点が重要となり、これより両全の形“モノ”として見る視点と言ってよいのだろう」と述べていること[佐野 2002:3]を参照。

[3] 田中は、「道具的世界観」の問題について、「ひとつは、個人の周りの人々、モノ、生物世界の総体である自然（以下、他者・モノ・自然と一括して呼ぶことにする）を合目的的な視点から捉えようとすることである。私と他者・モノ・自然との関係は効率によって規定される。（中略）効率性は本来多様なはずの関係を一元的な関係、すなわち経過時間や達成量などの数字へと還元してしまう。（中略）もうひとつの問題は、主客の関係が常に一方的であるということである」と指摘する[田中 2009:7]。

[4] 田中は「本書は、フェティシズム或いはフェティシュをめぐる言説を明らかにすると同時に、それらの最大公約的な理解――力が宿っているとされるモノ――を通じて人とモノや身体について何か言えるのかという展望を示唆したいのである」と述べ、「モノの力」を認めた[田中 2009:5]。

[5] また、その焦点には時間的と空間的な推移も大きく影響する。これについて、床呂郁哉は「同じ〈もの〉であっても、その〈もの〉は時間的・空間的な推移にともなってさまざまな側面をもつものであるし、それゆえ、ひととの関わりかたもさまざまな様相をみせることになる」と述べている[床呂 2011:4]。

[6] 奥田によれば、これはナショナルな戦争「被害者意識」という物語を指す[床呂 2011: 123]。

[7] キャロル・グロックは、日本における「戦後の記憶」において、国家によ

る記憶を「公式の記憶（Official Memory）」、国民に共有される記憶を「共通的記憶（Public Memory）」と言う[キャロル・グロック 1995]。本論で用いる「公的記憶」はキャロルが言う「公式の記憶」として、国家のような行政が提唱するオフィシャルな記憶のことを指す。

8 「広島平和記念都市建設法」は、1949 年 8 月 6 日に公布された（法律第 219 号）。この法律の目的は、「恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として、広島市を平和記念都市として建設すること」である。広島市を他の戦災都市と同じように単に復興するだけでなく、恒久平和を象徴する平和記念都市として建設しようということであった。この法律により、復興都市計画が建てられた。詳細は
httpp://www.city.hiroshima.jpp/gikai/c_main2-1.html（最終アクセス 2012 年 2 月 28 日）を参照されたい。

9 原爆資料館のほか、原爆体験の記念施設として、広島平和記念公園の中には、広島平和都市記念碑（原爆死没者慰霊碑）、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館、原爆ドームなど 56 ヵ所以上の施設がある。それぞれは、国や、広島市、民間団体などによって建設された。詳細は、広島平記念資料館の正式サイト http://www.pcf.city.hiroshima.jp/を参照（最終アクセス 2012 年 2 月 28 日）。

10 広島平和記念資料館の変遷に関しては、筆者の修士論文「原爆体験の展示――広島平和記念資料館における公的記憶」（2009 年、広島大学大学院国際協力研究科）を参照されたい。

11 一般的には、広島平和記念都市建設法によって平和記念施設としてその名前に「平和」という言葉が冠されたと理解されるが、奥田や米山が社会背景などに関する多様な理由を示している[奥田 2010: 118-120;米山 1999: 25-29]。

12 1967 年に広島市の一局として発足し、1999 年財団法人広島市国際交流協会と統合し、新しい組織の「財団法人広島平和文化センター」として、また 2011 年 4 月から公益財団法人として発足した。広島平和記念資料館、広島国際会議場の管理・運営を広島市から、2003 年開館の国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の管理・運営を厚生労働省から委託を受ける。会長は、広島市長が兼任する。詳細は、httpp://www.ppcf.city.hiroshima.jpp/hppcf/gaiyou.html を参照（最終アクセス 2012 年 2 月 28 日）。

13 広島平和文化センターにおける職員の人数は 2009 年までの統計である。

14 「人影の石」は広島平和資料館に寄贈される前、「死の人影」と呼ばれている。住友銀行広島支店の改築工事に伴い、17 日に、広島平和記念資料館に移された[朝日新聞社 1971]。

[15] 吉田憲司は、博物館は、収蔵庫ではなく、接触する場であると指摘する。「地球規模の移動と交流が進むなかで、言語の壁を越えて誰にでもアクセスできる民族学博物館の展示は、文化の表象の実践の場、あるいは表象する側と表象される側との接触の場として、文字で書かれた民族誌以上に熱いまなざしにさらされているのである」と示唆する[吉田 1999:4]。ところが、本論では、博物館におけるモノは表象の道具でなく、直接に人と接触することは、主体と客体を越える文化の実践であると考える。即ち、博物館は表象する側と表象される側という人と人の接触だけではく、モノと人との接触する場でもある。これは民族学博物館と戦争記念館、平和博物館など性質の異なる博物館に共通するものである。

[16] 孫歌は、日中戦争における衝突と解決のための方法としては、歴史認識に問題があるだけではなく、個人としての市民の「感情の記憶」を重視しなければいけないと提示する。感情の記憶を共感し、慰めることが互いの理解を深める不可欠な要点である。[孫 2004]を参照。

[17] 「人間の視点」「個人の被害」については、[広島平和記念資料館 2010]を参照。

参考文献

足立明

2009「人とモノのネットワーク――モノを取りもどすこと」『フィテイシズムの系譜と展望』田中雅一編、pp.175-193、京都大学学術出版社。

内堀基光

1997「ものと人からなる世界」『「もの」の人間世界』青木保・内堀基光ほか編、pp.1-22、岩波書店。

大西秀之

2009「モノ愛でるコトバを越えて――語りえぬ日常世界の社会的実践」『フェティシズム論の系譜と展望』田中雅一編、pp.149-174、京都大学学術出版社。

大貫良夫

1997「ものの見せ方――博物館と展示」『「もの」の人間世界』青木保・内堀基光ほか編、pp.261-281、岩波書店。

小川伸彦
1999「保存の空間―博物館がもたらすもの」『研究年報』、63:49-55。
奥田博子
2010『原爆の記憶――ヒロシマ/ナガサキの思想』慶応義塾大学出版社。
キャロル・グロック
1995「戦後 50 年―日本・ヨーロッパ・アジア　交錯するナショナリズム―記憶の地平」『世界』、11（615）:22-34。
佐野賢治
2002「もの・モノ・物の世界――序にかえて」『もの・モノ・物の世界――新たな日本文化論』佐野賢治ほか（編）、pp.1-7、雄山閣。
孫歌
2000「日中戦争　感情と歴史の構図」坂井洋史訳、『世界』、673:158-170。
高橋真司
2007「原爆死から平和責任へ―被爆体験の思想化の試み」『長崎大学教育学部社会学論叢』、69:1-16。
田中雅一
2009「フェティシズム研究の課題と展望」『フェティシズム論の系譜と展望』田中雅一編、pp.3-38、京都大学学術出版社。
床呂郁哉
2011『ものの人類学』河合香吏編、京都大学学術出版社。
林史樹
2003「文化展示とアフォーダンス――「ものが語る」というディスコースをめぐって」『国立民族学博物館調査報告』、44:169-182。
藤原帰一
2001『戦争を記憶する―広島・ホロコーストと現在』講談社。
松田素二
2009「平和のフェティシズム考――文化的フェティシズムの新たな地平」『フェティシズム論の系譜』田中雅一編、pp.241-274、京都大学学術出版社。
森下一徹

1982『遺品は語る』深沢一夫著、汐文社。
吉田憲司
1999『文化の発見――驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店。
米山リサ
1999『広島/記憶のポリティクス』岩波書店。
ロバート・J・リフトン ほか
1971『死の内の生命――ヒロシマの生存者』湯浅信之ほか訳、朝日新聞社。

参考資料

都市計画協会
1950『新都市』、4(8):16
広島市議会
1991『広島市議会史（昭和 戦後編）』広島市議会。
広島平和記念資料館
2007『(図録)ヒロシマを世界に』広島平和記念資料館。
2010『第7回広島平和記念資料館展示整備等基本計画　検討委員会資料』広島平和記念資料館。
朝日新聞社
『朝日新聞』、1971年7月9日
広島平和文化センター
2005「被爆体験の継承を目指して――歴代館長座談会〈平和記念資料館の50年を語る〉」『平和文化』、159:14-15

（yangxiaopingjp@yahoo.co.jp）